
俺と天使の共同生活

夜行性

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と天使の共同生活

【Nコード】

N4571T

【作者名】

夜行性

【あらすじ】

冴えない高校2年生である俺、星道 創輝はある日、女の子を見つけて連れて帰った……ってそのまま同居すんの？金の心配より俺の心配だ。主に自制心で。

プロローグ（前書き）

初めまして、夜行性と言います。

名前？文字通り夜中にinnするのが多いので……

拙い文章の上、あまり展開を考えずに書いていますのでgdgdな
文になること請け合いです。

もう暇で暇でしゃーない方だけに読む事をお勧めします。

では、本編……プロローグへ。

プロローグ

俺の名前は星道せいどう 創輝そうき。

なんつー名前だと思っただろうが歴とした本名だ。住民票にも載っている。

黒髪黒目。他には特徴無し。

高校2年生。成績は落第しない程度とだけ言っておく。

一人暮らし。と言っても父も母も立派にご存命だ。ちよいとワケ有りでさるアパートで下宿生活を送っている。

見た目はボロいが中は意外と広くて清潔。家賃も安い。ついでに高校からも近い。近所にコンビニもある。俺にとっては中々の良物件だ。

友好関係はまずまず。つまはじきにあったりはしていない。幼稚園からずっと一緒に幼馴染みもいるしな。

小遣いなんかは両親に仕送りして貰っている。大学に入ったらバイトで少しずつ返していく予定。

帰宅部。

宗教その他の団体にも所属していない。

将来の夢も無し。

希望も無し。

やる気も無し。

テキトーに高校に行つて、テキトーに授業受けて、テキトーに帰つて、テキトーに遊んで、テキトーに寝る。

そんな感じの毎日。

昨日も今日も明日もそんな感じ。

最近、教師勢が『早めに進路を決めておけ』と五月蠅いが無いものは仕方あるまい。

一寸先は闇……というより真っ白。

そんな無気力学生。

それが俺、星道 創輝という人間である。

第1話 出会は突然というのが常識らしい(前書き)

はい、急展開ですよ。1話目から急展開って何やねん。

まーあれだ。ある意味まだプロローグ的な所があるから大丈夫だ、問題ない。

第1話 出会いは突然というのが常識らしい

ところで、聞きたい事がある。

今日は朝から遅刻寸前で高校に弾丸ダッシュ。息も絶え絶えなのを幼なじみに説教され、友からはその様子をからかわれて赤っ恥をかいた他は対したこともなく。

数学で軽く睡眠をとり、あまり好きじゃない体育をなあなあで耐え凌ぎ、食堂で飯を食っていたらいつの間にか幼なじみと友が寄って来て喋りながら食うことに。

そして3人で帰路につき、別れた後に家でしばらくまったりとした後にコンビニからの帰り……夕食を買ってきた訳だが、そんないつものルーチンワークの如き作業の帰りに。

道端に女の子が落ちていたら、どう対処すれば良い？

透き通る銀の長髪、雪のような白肌、細めの体にアンバランスな程大きな胸。

くたつと地面にお尻を着けて座り込んでいる形。伏せられている顔は髪のカートンで分らない。

清楚な白いワンピース。体にフィットしているのか体の線が出まくりである。ハッキリ言ってエロい。

やばい俺がやばい色々やばい。

こんな女の子アニメかラノベの中で見ただけしか見たことねーぞ！

……ああ、分かっている。

さつきまで『昨日も今日も明日もそんな感じ』とかほざきながら、今日が既に変容している。

『昨日まではそんな感じ』と言い換えた方が良くかもしれない。が、言い換えたところで目の前の女の子が消える訳でも無く。

というか、目の前で消えたらそれはそれで非日常だがそれはとも

かく。

当然、こんなのが日常な訳が無い。毎日のように落ちている女の子を見かけるような地域ではない……等。

まあ、住んで1年程度ではあまりこの街を語る訳にはいかないかも知れない。もしかしたら、俺が知らないだけでこちら辺はよく人が落ちているような、そんな街なのかも知れない。

……いや、ねーよ。

そんな街に住んでたまるか。

ニユースになる。

『怪奇！神隠しの起こる街！？』的な。

つまり、やはりこれは普通の日本の普通の街の普通の高校生が遭った普通じゃない出来事ということだ。

そんな俺に出来ることはただ1つ。

「なんでやねん」

ツッコミだった。

いや、なんでやねん。

何故また、よりによって俺みたいな奴がこんなことに。

凡庸凡才煩惱だらけな俺にこんなことがあつてはならない。

しかも行きにはいなかったぞ、多分。

いなかった……等。

無意識に気付かなかった可能性も否定できない。

もしかしたら、彼女はずっとここで寝ていたのかも知れない。

いや、ちよつと待て。そもそもこれは人間か？よく出来たマネキンが不法投棄されたと言った方がまだリアリティがある。

そうだ。マネキンなんだこれ。だったら捨てられていても何も問題は無い。いつの間にかゴミ業者か何かが回収しておしまいだ。俺の出る幕はない。

ならばどうやって確かめるか。そりゃ触ればいい。

しかし、万が一の可能性もある。そうなると無実の罪で通報無しは口止め料を要求されるかもしれない。

流石にトラブルに巻き込まれるのは遠慮したい。なので俺はちゃんと断つてから事に及んだ。

「今から君の太ももの内股辺りを触りますよ」

宣言通りの場所にゆっくりと手を伸ばす。ちなみに選んだ箇所に他意はない。ただ、素肌が露出しており、且つ目に付いた所を触るだけだ。

……別に太ももばかり見ていた訳じゃない。俺を舐めないでくれ。胸もちゃんと見ていた。

ふにつ。

柔らかい。ついでに温かい。

丁度人間の、しかも女の子みたいな感触。

いやいや、もしかしたら俺が知らないだけで最近のマネキンはリアルを追究した結果、人肌程度の温かさや柔らかさを合わせ持つのかも知れない。

つまり、これはやはりマネキンな訳で

「うう、ん」

可愛らしい女の子の声が聞こえた。勿論俺の声ではない。周りには誰もいない。

というか、目の前のマネキンが呻いたような。

いやいや、もしかしたら俺が知らないだけで最近のマネキンは声を出す程度に進化しているのかも知れない。

最近はより人間らしさを追究したロボットが造られているからな。案外、その類のマネキンが捨てられていただけだろう。

うんうん。マネキンだマネキン。

「……あれ？」

目を開いた女の子……じゃない、マネキン。

見上げてくる瞳は蒼く澄み切っており、不思議と吸い寄せられる気分になる。

最近のマネキン恐るべし。

「ええつと……」

言葉を探している様子。えらく感情を出すのが上手いな。人工頭脳っていつの間に完成したんだろう？

「1つ、訊いても良いですか？」

「ん、どうぞ」

聞こえてくるソプラノは耳に心地良く、俺の脳を掻き乱す。

冷静に答えているように見えるかもだが、言葉少なにする事で興奮を漏れないようにしているだけだ。

やっべえマジこの娘可愛い。

なんかもう、持ち帰りたいぐらい

「私は誰ですか？」

……は？

第2話 分からなくても意思はある

「ゴメンもう一回言って」

「ですから、私は誰でしょう?」

「……」

こっちが訊きたい。

いや、もうマネキンの説は諦めた。

この娘……何者ぞ?

「でも、貴方が私を起こしたのでは?」

「ん、いや確かにそうだが」

太もも触ったからな。

ふにふにでした。

断じて他意はない。

「俺はただ、道端に寝ている女の子がいたから起こそうとしたただだ」

マネキン扱いしていたのは伏せておく。

『お人形さんみたい』と言い換えられないことも無いが、どっちにしる変態だ。

夜中の路上で見知らぬ女の子にそんなことを言うような大人にはなりたくない。

……なんとなく、冷たい視線を感じるが気の所為だと信じたい。

「そうでしたか」

そう言つと彼女は立ち上がり、軽くお尻の辺りを叩いた後、

「ありがとうございます」

お辞儀してきた。

それはもうお辞儀の見本みたいなお辞儀だった。

仰角90°ぐらい。

最敬礼。

「いや、礼儀正しいのは良いんだけどさ……俺の名前は星道 創輝

って言う。星の道に創立の創で輝きと書く」

「なんだかロマンチックですね」

「よく言われる」

星道は苗字だからともかく、創輝って物凄い字面だよな。下手すればDQNネームと言われてもおかしくない。

……こっそり言われてる可能性も否めない。

「君の名前は？」

「分かりません」

「親は？」

「分かりません」

「家は？」

「分かりません」

「……」

「……ごめんなさい」

眉の曲がった申し訳なさそうな表情も可愛いなあ……じゃなくて何もかも分からないらしい。本人を前に厄介と言っではいけないのだろうがあえて、厄介だ。

落ち着いたら何か思い出す可能性も0ではない。それに親御さんが搜索しているかも。まさかそんな遠くから来た可能性は……外見的に外国から来たのかもしれないけど。だとしたら俺では全くどうしようもない。

なんにせよ、こんな夜中に1人で残す訳にもいかない。が、現状託すべき場所も分からないとなると……

「はあ……しょうがない。とりあえず移動するか」

「移動、ですか？」

「こんな道端で話すよりどこかで腰を落ち着けて話した方がいいと思っただ」

「そうですね」

素直について来てくれる様だ。手間がかからなくて助かる。

さて、どこに行くか……

第2話 分からなくても意思はある（後書き）

思っただが一度にうつる量が少なすぎる気がする。

今度からもっと纏めてうつるか？その方がいいよなあ。

今はもう幾らか書き貯めしちゃったので今度からはもう少し長くならないように心がけたいと思いますですハイ。

そうそう、今度からは出来るだけ前書きじゃなくて後書きにするぜ。
その方がまだ読みやすいかなーっという淡い期待。

では、また次回〜。

第3話 異性の家に入る時はもう少し警戒して欲しい

「ま、遠慮せずに上がってくれ」

「お邪魔します」

結局、俺の家に連れて来た。

どうせ1人暮しだし大丈夫……だと思っ

いやまあ、こんなボロアパートに可愛い女の子を連れ込む罪悪感が芽生えもしたが、正直ここ以外の場所を思い付かなかったのだ。コンビニからの帰りだったし。

「何だか匂いがしますね」

「男の1人暮らしだからな」

「良い匂いです」

「……」

なんか無理に言っていないか？

男臭さって女性は忌避するもんだと思うんだが。

「創輝さんの匂いって安心します」

「その発言は若干危ない」

「え？」

「いや、なんでもない」

自覚症状無し。天然なのかも知れない。

聞く度にドギマギしてしまうので正直止めてほしい。

「で、どーするか」

「何をですか？」

キョトンと首を傾げる。君なあ……

「うっむ、呼び名が無いって難しいな。何か無いか？」

「そう言われましても、何も思い出せないの……」

「何でもいい。何か捻り出せ」

「おトイレですか？」

「違う」

発想が凄い。

つか、食事前に言うことじゃ……あ。

「そういや君、お腹空いてる？」

「いえ、そこまでお世話になる訳には
ぐうー。」

勿論、俺や彼女の声でも、俺の腹の音でもない。

何この定番の展開。顔真っ赤にして可愛いな。

……さて。

「ごちゃごちゃ考える前に食うか」

丁度、コンビニ弁当を買ってきたしな。冷めてるけど。

今日は大盛りだから分量的には大丈夫だ。

「い、いえ。お構いなく」

「君な。そんな大きな腹の音出しといて遠慮しなくていいから」

「でも、さっき会ったばかりですし」

「難しい事気にしてる暇があったらご馳走になった方がいいぞ。俺
は別に君をどうこうするつもりは無いし」

今の所。

そりゃ、自分の部屋に可愛い女の子と2人きりって……なあ？

うん、出来るだけ我慢する。これでも高校ではどちらかと紳士的
として知られている俺だ。ここはグツと堪えて自分を殺さなくては
ならない。

「それじゃあ、お言葉に甘えまして」

「そうそう。世話してくれる人には甘えとかないと世の中生きにく
いぜ」

向こうは向こうで全くの無警戒みたいだが。そうじゃなきゃホイ
ホイついて来たりしないよなあ。

信頼されてる……とはまた違うか。さっき会ったばかりだし。

ま、考えるのは後にしよう。飯を食べれば何か打開策が思い付くか
も、だ。

俺は少しばかり冷めてしまったコンビニ弁当を温めにレンジへ向

かう。

「……ふう」

賢者ではない。腹が満たされたら言いたくなるだろう？

「ご馳走様でした。美味しかったです」

「お粗末様。ま、コンビ二弁当だけ」

「凄く美味しかったですよ。お漬物はシャキシャキでしたし、唐揚げは味がしつかし付いてましたし」

「弁当製造してる人が聞いたら泣いて喜びそうだ」

何より、その満面の笑みよ。こっちまで頬が緩みそうだ。

笑顔の無駄遣いじゃないのか。これで本当に美味しい物食べたらどんな反応をするんだろう。

「さて、と」

弁当の容器も全て片付けた。

今は盤上に障害物の無い机で対面している形。

「何も思い出せない……だったよな」

「はい」

「でも、日常生活は普通に送れるのか」

彼女が見た目の割に箸を使えることに驚いた。

何人か知らないが、外見は思いつきり異邦人なのだが。

しかし、これはプラスでもある。

「生活するには困らないしな」

「生活、ですか？」

「ん、嫌か？」

そりゃあ嫌か。

男と女で2人きりって危険な匂いしかなないもんなあ。

「しかし、流石に他の人に任せられそうもないし」

女友達がない事も無いが、まさか『女の子を拾ったので世話し

てやってくれ』なんて言える訳が無い。主に俺へのあらぬ疑惑で。男なら喜んで入れてくれる奴もいるが、性格を考えると任せられないだろう。

彼女の身の危険も考慮しなければいけないのが保護者の責任だと思う。

……まあ、俺が襲う可能性も無きにしにあらず……俺も男ですから！全ての危険を想定するのも義務ですから！！

「ですから、私は大丈夫ですが」

「あ、ゴメン。もう一回言って」

考え事に熱中していたら話を聞けていなかった。

きつと彼女からの好感度が下がったな……一生の不覚。

「ですから、創輝さんが良いのなら私はここで一緒に暮らしても良い、と言ったのですけれど。やっぱり難しいですよね」

「え、俺の家に住むの!？」

「あら？さっきの『生活するには困らない』ってそういうことじゃなかったんですか？」

口調が全く冗談じゃねえ。本気だ。

今日初めて知り合った男と同じ部屋に住んでも良いという住所不定の女の子。

うわあ、危険な臭いしかしねえ！

「俺はてつきり他の家に預ける方向で考えてたんだが」

「誰か候補が？」

「……いないな」

俺と同じアパートに住んでいる奴もいるし、今から訪ねてみるのも最終手段として残っていた。面倒見のいいあいつなら引き受けてくれそうだし。

しかしまさか、俺の家にそのまま住んでしまう選択肢があったとは。

でも待てよ。友達知り合いには任せられそうにないのなら、自分が面倒を見てやるというのも1つの手ではある。最低でも他の輩の

魔の手から逃れることは出来そうだ。

他と言った時点で俺が魔の手を伸ばさないという確証が無いことが判明してしまっただが気にしないこととする。

「私がいても生活費を切り詰めるだけで何も得になりませんしね…

…」

「いや、それは大丈夫だけど」

「無理しなくても」

「ホントホント。あんまり仕送りの金を使わなかったからもう一人ぐらいなら平気だって」

趣味と言ってもたまに気に入ったゲームや本を買うぐらい。パソコンなんか無いし、なるべく節約して過ごしているから生活費もそんなにかかっていない。

彼女にも節制させるのは少し酷かも知れないが、我が家は代々地味で慎ましく生きてきた家系なので今更変えようがないのだ。

骨髓まで刻み込まれた貧乏性である。

「しかし、創輝さんのお金を無駄に使うだけでメリットが無いのでは」

「メリットねえ……」

目の保養その他になるからむしろ居てほしいんだけど。

『体で払え!』というのだけは絶対しないと決めている。

いや、そんなことを言う度胸も無いんだけど。

「というか、メリット云々より放っておけないさ。あんまり気にしなくていいぞ？豪勢な暮らしは期待出来ないだろうけど」

「本当に、良いんですか？」

「うん。何も問題はない」

「……でしたら、お言葉に甘えます」

そう言いながら急に体全体が見える位置まで移動したかと思ったら「ふつつか者ですが、宜しく願います」

地面に擦るほど頭を下げ、手をきっちり揃えて頭の前。足は折り曲げて正座。

早い話、土下座。

この16年間、生まれて初めて土下座なんてされたんですけど。しかも相手は美少女。

凄まじい背徳感。

「と、とにかく土下座はやめてくれ」

「?ここではお願いをする時はこうするのが礼儀なのでは?」

「礼儀というか最終手段だ。こういう時は……そう。笑顔で『ありがとう』で良い」

「なるほど」

上半身を起こし、しかし相変わらずの正座状態。

表情は柔らかく、目は細められ、唇が弓なりに緩められる。

「ありがとう」

その唇から紡がれる声は脳を優しく震わせ、心臓を鷲掴みに

「ブツ!?!」

「ど、どうしました!?!」

彼女に驚かれたが、勘弁してほしい。

俺だって健全な男性であり、ノーマルより少しだけらしい人間だ
と思う。

いやもう、破壊力高すぎる。

鼻血出そう。

「鼻が痛いんですか?鼻血?ティッシュ持ってきましょうか?それ
とも救急箱?」

心配そうに顔を覗き込んでくる……って顔近っ!!

いくら何でも『あっち行け』なんて言うのは誤解される!しかし、
このままでは!?!

「えっと、えっと、そうだ!」

急に大声を上げたかと思うと、俺の鼻に手を重ね、

「痛い痛い痛い痛い飛んでけーっ!」

「ごっぶあ!?!」

可愛らしい声で本気のおまじない。

この少女、天然過ぎる。そして萌える。
そんなことを考えながら、俺の意識は昇天していった。

第3話 異性の家に入る時はもう少し警戒して欲しい(後書き)

タイトルは毎回テキストに決めてます。書き貯めしてる時にはタイトル決めてないのでうつつた時にインスピレーションで。正直深い意味は無(ry

とりあえず次で書き貯め終了のお知らせ。今度から1週間以上空くなんてザラになりますぜゴーマイウェイ。

では、また次回〜。

第5話 寝てる時に不意打ちされると死ぬる

「創輝！。ボサツと立ってないでシャキシャキ歩きなよ」

俺の名前を呼ぶ声がする。

あれ？これはいつの話だっけ？

「大体、あんたって奴はずっと、ずーっとポヤーっとしてんだから。少しは私を見習ってキビキビ動いてみなさい」

なんかもう、酷い言い草である。

確かに夢やら目標やらは無いが、これでも毎日一生懸命なんだぜ。

「はいはい、分かったらちゃんと返事をしなさい。しっかりキツチリね」

全く、五月蠅いなあ。

そもそも、お前だっであっちこち放蕩してるじゃないか。

「うぐ……創輝にだけは言われなくなかったのに」

俺をなんだと思ってるんだ。

「そんなんだからいつまで経っても創輝は創輝なんですよ
意味が分かんらん。」

「とにかく、私がちやんと面倒を見てあげないとあんたはすぐ道を踏み外すんだから」

非行少年みたいに言わないで欲しい。

「しょうがない。この私が引き受けてあげるわよ」

何？結婚的な？

「そ、そんな訳無いでしょーが！ぶっ飛んだ想像も大概にしなさい
」！

想像の中なら何したって自由じゃねーか。

俺は嫌いじゃないぜ、お前の事。

「ッ！こんの、馬鹿ー！」

ドスウン！！

「げっばえ!？」

突然、腹に物凄い衝撃が。

痛くて涙が漏れる。なんなんだ？

「創輝さん！起きましたか？」

笑顔でこちらを見てくる少女。周りは見慣れた俺の部屋。

ようやく記憶がはつきりしてきた。彼女のおまじないとやらで俺が気絶した後だ。

「このまま起きなかつたらどうしようかと」

そういつて笑顔を向けてくる……のは良いのだが、俺の腹の上に右肘がめり込んでるんですが。

俺の腹に肘鉄当てたんですか、貴女。

見た目と雰囲気に沿わず中々アクティブな女性らしい。

「だ、だいじよぶ」

腹の調子はあまり大丈夫じゃなかつたりするが。

男として、女の子の前では戻せない。

「取り敢えず、どいて」

「あ、はい」

上半身を起こす。

……うん、吐き気は治まった……と思う。

「しょ、しよれで？」

「しよれ？」

まだ呂律が戻っていなかった。

「あ、ううん……それで、君はしばらくここに住むことになる訳だが……本当に良いのか？」

「創輝さんが宜しければ」

至極あっさり言っ退けた。

あれえ？女の子ってもう少し身持ちが堅いもんじゃなかつたっけ？

俺が女子の家に泊まったのなんて幼稚園の時に幼なじみの家で遊んで疲れ果ててそのまま眠った時ぐらい。しかもお昼から夕方ぐら

いまでの話である。

男と女では感覚が違うということか。でもそれなら普通、女の方が厳しいはずじゃないか？

「ところで、どうすればいいんでしょう？」

「何を？」

「寝場所を。見たところ、この部屋にはベッドや布団は見当たりませんが」

「ん、あー……」

そうか。それも問題だな。

いや、彼女については別に困らないのだけれど。

「そのこの襖を開けたら右手に押し入れがある。その中に布団が一式入ってると思うからそれを使ってくれ。少し、いやかなり臭うと思うが我慢して欲しい」

正直そこしかまともな寝床無いんで。

1人暮らしのアパート暮らしなんだから当然なのだが。

「でも創輝さんはどこで寝るんですか？」

そう、これが問題。

「ん、まあ適当に寝るよ」

「それでは迷惑がかかります」

やっぱりきたよ。この娘ならこうくると思ったんだ。

「別に良いんだけどなあ」

学校で机で突っ伏して寝るなんてザラだし。

人間、その気になればどこでも寝れる。

「さつきも言ったことを繰り返すけどほっておけない。隣に女の子がいるのに自分だけ布団に入っても気になって寝れやしないからな。俺も寝れないし君も寝れない。だったら君にはまともな寝床で横になつて貰わないとね」

まあ、そこで寝れるかどうか別の話だがそこは本人にどうにかして貰うしかない。何しろ突然なことなので準備も何も無いのである。今度の休みに色々と買い集める必要がありそうだ。

「だから俺の為にも、頼む！」
パンツと柏手1つ。

『俺の布団で寝てくれ』と出会ったばかりの女の子を拝む男子高校2年生の図。

簡潔に纏めた文だと犯罪の臭いしか漂ってこないのは何故だろうか。

違う……俺は彼女が心配なだけだ……っ！

「……分かりました。使わせて貰いますね」

「ああ。これで安心した」

オーバーに胸を撫で下ろす仕草なんてしてみたり。

この娘、優しい上に純真だからな。ちょっと大袈裟な方が話を進め易そうという姑息な計算。

「服は着替えようが無いからそのまま寝てくれ。今度の休みに買っていくからそれまで我慢してくれると助かる」

「我慢だなんて、私はお邪魔しているだけですからそんなにお金を使わなくても」

「だからその程度の小遣いは余裕であるから心配しないで良いつて流石にブランド物は無理だと思っけど」

「そんな凄そうな物は着たことありません……多分」

「そうか？君なら高級な服でも似合いそうなものだけ」

「からかわないで下さい」

そう言いながら笑う彼女。

うーん、やっぱりこの笑顔が出せる人間は何を着ても似合うと思っんだ。

「それじゃ寢床は決まったし夜も深いしもう寝るか」

時計を見てみるととくに次の日になっていた。

コンビニに向かった時刻からして遅かったのもあるが、気絶してた時間が意外と長かったようだ。

その間、彼女は何を考えて俺の腹に肘鉄をぶち込む結果に至ったのだろう……？

「それじゃ、また明日」

「はい、お休みなさい」

襖が閉じられる。締め切ったりして臭いは大丈夫なんだろうか？自分の体臭や家の臭いって気付きにくいからこういう時に困る。

続いて何か物が落とされる音。ちゃんと布団の場所は分かってくれたらしい。というか布団のシーツもしばらく洗ってない。今度洗濯せねばなるまい。

そういや風呂に入れてやってもいなかった。地面に直接座ってたから汚れとか気になるだろうに……ああ、なんでこんなに気が回らないんだ？自分で自分が嫌になるぞ。

しょうがない。もう寝るしかないんだから明日は忘れないように気をつけよう。今更変えることも出来ない。

俺の寢床にはソファでもあればよかったのだが生憎と俺の部屋にはない。壁に寄り掛かって寝よう。起きたら腰が痛いだろうが寝れないよりマシだ。

でもなあ、大体俺の扱いもそんなに丁寧じゃないし、向こうも恐縮しまくってあまり交流出来ない気がするし、それから……

~~~~~

……何でしょうか。

はい、はい。了解しました。

しかし、それでは情報が足りなすぎて……はい？上から情報が来ない、と？

……いつもの事ですから良いですが。時間が掛かるかと思いますが、宜しいですね？拒否されたら私にはこの仕事が向いていないので下りさせて貰います。

いえ、冗談です。しっかり仕事させて貰います。

では失礼致します……ブチっと。  
全く、相変わらずだな。もう少しヒントをくれても良いじゃないか。  
上の方はケチなのか何なのか。  
見る側としては楽なんだろう。だが、駆けずり回る側は大変だ。  
面倒で仕方ない。  
愚痴っついていても始まらない、か。そうだな、動き出すのは早い方が  
良い。明日にでも行動開始としようか……

## 第5話 寝てる時に不意打ちされると死ぬる（後書き）

さて、更新が遅くなって申し訳ない次第。てか誰か読んでるのコレ？きつとこないな。おk。大丈夫だ、問題無い！

今度からは1週間1話ペースにしていきたいところ。そうじゃなきゃ延々終わりませんからねえ。拙い話で面白くなって下らなからうが、最後まで書く気ではいるので。

では、また次回。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4571t/>

---

俺と天使の共同生活

2011年6月14日00時40分発行